

そ の 他

若手小児外科医の ECFMG certificate 取得への挑戦 ～米國小児外科臨床留学を目指して～

矢田 圭吾¹⁾, 石橋 広樹¹⁾, 森 大樹¹⁾, 佐藤 宏彦¹⁾, 宇都宮 徹²⁾,
島田 光生²⁾

¹⁾徳島大学病院小児外科・小児内視鏡外科

²⁾徳島大学消化器・移植外科学

(平成25年7月3日受付) (平成25年7月4日受理)

国際化に伴い、医師が海外で活躍する機会は増えている。特に米国では質の保障された小児外科臨床研修を行うことができるが、そのためには ECFMG certification 取得が必要である。また、2004年度に卒後臨床研修制度が導入され、多様化した卒後教育課程の中で、効率よく留学準備を進めることが重要である。ECFMG certification は、USMLE step1, step2 CK, step2 CS に合格することで得られる資格であり、米国で臨床医として働くための必要最低条件といえる。Step1およびStep2 CKは、それぞれ基礎医学・臨床医学に焦点を当てた選択肢試験であり、Step2 CSは12名の模擬患者を相手にした実技試験である。筆者自身が経験した USMLE 各ステップ試験から ECFMG certification 取得まで、卒後臨床研修に関するキャリアデザインを交えて報告する。

はじめに

2004年度に卒後臨床研修制度が導入され、医学部卒業後の進路は多様化している(図1)。すなわち、制度導入前は、医学部卒業後すぐに大学医局に入局し、大学または関連病院での専門医研修や大学院に進学するパターンが多かったが、制度導入後は、2年間の卒後臨床研修の後に大学関連施設に入局する(パターン①)、2年間の卒後臨床研修の後に、後期研修や専門医研修などと称される3-4年の専門科研修を経て大学関連施設に入局

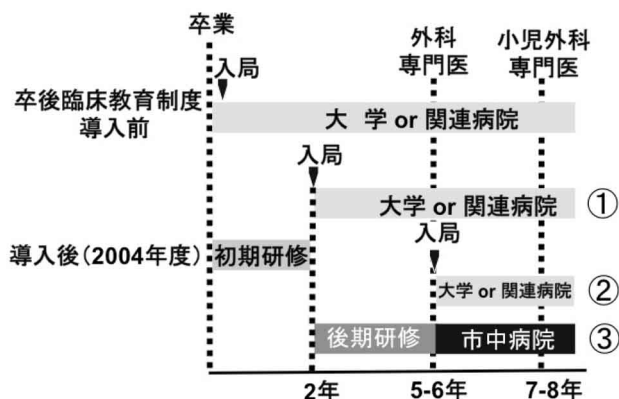


図1：卒後教育課程の昨今。

する(パターン②)、また、大学関連施設に入局すること無く研修施設でスタッフとして働く(パターン③)と多様化している。

また、国際化に伴い、外科医が海外で活躍する機会は増えている¹⁻³⁾。特に、医療先進国の米国は、魅力的な小児外科臨床研修を行うことのできる国の一つであるが、米国で働くためには ECFMG certification が必要であり、さらに全米で数カ所に限られた小児外科分野での international fellowship のポジションを獲得するのは難しい。

ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates) certification は、USMLE (United States Medical Licensing Examination) step1, step2 CK (Clinical Knowledge), step2 CS (Clinical Skill) に合格することで得られる資格であり、アメリカで臨床医として働

くための必要最低条件といえる。Step1は、基礎医学に焦点を当てた322問（60分×7ブロック）からなる選択肢試験である。Step2 CKは、臨床医学に焦点を当てた選択肢試験であり、346問（60分×8ブロック）からなる。一方 step2 CSは12名の模擬患者を相手にして、15分間の問診・診察および10分間のカルテ記載を行う実技試験である。Step1, Step2 CKは日本では東京・大阪で受験可能であるが、step2 CSはアメリカ本土5カ所の専用試験センターで受験する必要がある。合格率はstep1が66%, step2 CKが79%, step2 CSが75%である⁴⁾。外国人受験者で最終的に ECFMG certification を取得するのは、57.2%である⁴⁾。米国以外の医学部出身者で2011年に ECFMG certificate を得たのは9791人であり、国別で最も多いのはインドで1590人であった⁴⁾。日本人は73人（0.7%）で34番目であった⁴⁾。

自身の体験

USMLE との出会いは、大学3年生の時（H16年）まで遡る。チュートリアル神経コースの講義の際に、徳島大学神経内科学の梶龍児教授（図2）がUSMLEおよびアメリカの医学教育について熱く語られたことに感銘をうけたことがそもそもの始まりである。

しかし、当時周囲にUSMLEを受験しようとする同

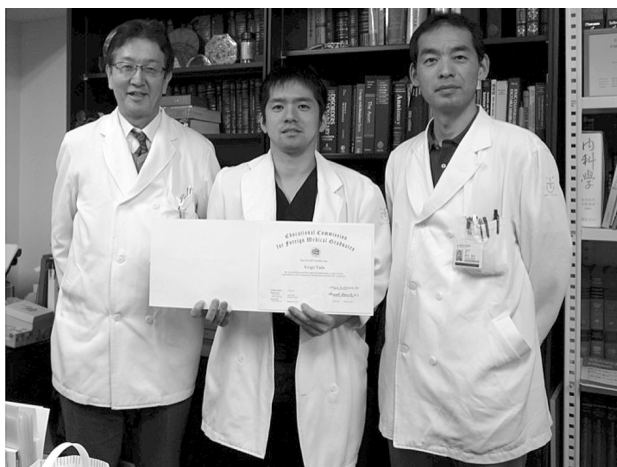


図2：徳島大学神経内科教授室にて。梶龍児先生（写真左）・野寺裕之先生（写真右）とともに。ECFMG certificateを手にした中央が筆者。

級生はおらず、自分なりに情報収集を進めるほかなく、あえなく挫折した。その後、大学6年生の学外実習で、当時臨床教育センター助教授をしておられた寺嶋吉保先生と消化器移植外科 島田光生教授のおかげで、ハワイ大学外科 町淳二先生のもとで6週間の externship を行う機会を得た。この経験を通して、アメリカの一般外科研修がいかに魅力的であるかを思い知らされ、外科分野でのアメリカ臨床留学を志すこととなった。町淳二先生によると、アメリカ一般外科レジデントを行うためには、① USMLE step1で score95以上の高得点をとること ②外国人が5年間の研修を約束された categorical position にマッチすることはほぼ不可能に近く、1-2年の予備研修である preliminary position に入ることになる。そこで生き抜くために、できれば日本で最低3年間は一般外科研修を行ってからのほうがよい。とのコメントを頂いた。大学6年生6月に日本に帰国後、step1での高得点取得を目指して、インターネットでの情報収集や初期研修マッチング目的の病院見学の際にUSMLEに挑戦している先生を捜してはUSMLEの勉強方法を模索した。その結果、① USMLE Forum という Web site があり、勉強法などに関する有用な情報が常に入手できること ② First aid for USMLE step1（最もスタンダードな参考書）をまず通読し、③ Kaplan の q bank というネット上の問題集（約2500問）を解き、その解説を読んで理解したことを First aid の隅に書き込んで行くこと（※H25年現在では kaplan q bank より「USMLE world」の方が断然主流である。）④日本の医師国家試験の知識がとても役に立つので、できれば日本の国試と並行して勉強し、3月を目途にstep1を受験するのがよい。という結論に達した（図3）。しかし、卒試・国試・卒業・結婚式（&新婚旅行）・引っ越し、なども重なり思うように時間がとれず初期研修医1年目4月に受験したstep1のscoreは92/222であり（図4）、目標としていたscore95までは届かなかった。しかし、町淳二先生にメールで相談したところ、score90を超えていれば preliminary での match の可能性はあるとのことであった。

私が初期研修を行った群星沖縄プログラム（中頭病院）⁵⁾は、まさに屋根瓦方式の研修医教育が根付いてい

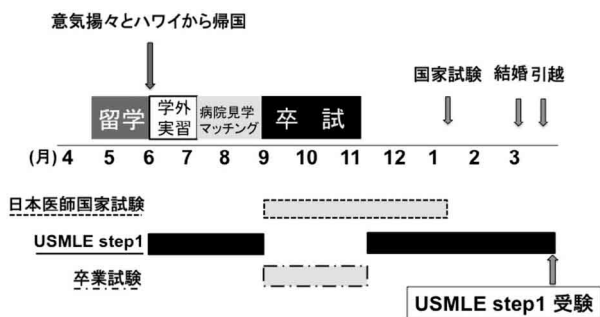


図3：大学6年生時の USMLE step1受験スケジュール。

	score (3-digit / 2-digit)
USMLE step1	222/92
USMLE step2 CK	221/91

図4：USMLE step1/step2 CK の成績

た。研修医1年目は息つく暇も無く過ぎ去り、2年目になり step2 CK の勉強を開始した。救急外来で1年目研修医を指導する傍ら、夜中の研修医室で step2 CK を勉強することもしばしばであった。初期研修医2年目2月に step2 CK を受験した(図5)。結果は91/221であり(図4)、我ながら研修医の間によく score 90がとれたものだと言った。しかし、喜んだのも束の間、次の壁にぶちあたった。step2 CS である。3月に Chicago で Kaplan medical 5 days course を受講後、Atlanta で step2 CS 本試験を受けたが結果はあえなく「Fail」であった。

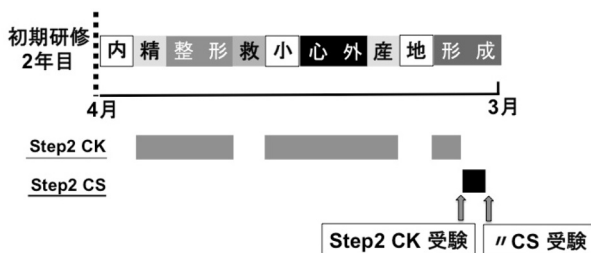


図5：初期研修2年時の USMLE step2 CK/CS 受験スケジュール。

Step2 CS のスコアリングは3つのコンポーネントからなる。すなわち①臨床能力 ICE (Integrated Clinical Encounter：問診・診察・カルテ記載内容からなる) ②英語力 SEP (Spoken English Proficiency) ③コミュニケーション・対人関係能力 CIS (Communication and Interpersonal Skill) である。合格のためにはこの3つのコンポーネント全てで合格点をとらなくてはならない。私のスコアレポートは ICE ; Fail CIS ; Pass SEP ; Pass であった。

初期研修終了後、中頭病院外科で3年間の一般外科研修(後期研修)を行った。中頭病院は年間総手術数が約9000例・一般外科の年間手術症例数2600例と症例が非常に豊富かつ、優秀な10人の外科指導医と3人の先輩外科研修医に恵まれ、3年間で482例の執刀手術症例を経験した。もともとマイペースで「外科系」とはほど遠い自分にとっては、非常にきつく多忙な毎日であったが、非常に充実していた。そんな中、知り合いの native speaker をお願いして週1回の英語のレッスンをしてもらった。ほとんど準備もできないままに、卒業5年目終わりの3月に Los Angeles で step2 CS に再挑戦したが、結果はあえなく「Fail」。スコアレポートは ICE ; Pass CIS ; Fail SEP ; Pass であった。前回不合格であった ICE (臨床能力) をカバーすべく、多くの情報を得ようと問診・診察を急ぐあまりに、CIS (コミュニケーション・対人関係能力) コンポーネントの患者説明やマナーの部分がおろそかになってしまっていたのだ。

2012年4月にかねてより希望していた小児外科修練を行うべく、徳島大学消化器移植外科・小児外科小児内視鏡外科(旧第一外科)に入局した。休暇を利用して、2012年12月に Los Angeles で3度目の Kaplan medical step2 CS コースおよび Step2 CS 本試験への挑戦を行った。3度目ともなると、試験に対する未知の不安は全くなかった。心境としては、「Step2 CS への挑戦を楽しむ」ことであり、新しいことを知る喜び・挑戦する喜びを感じながら準備を進めることができた。帰国子女でなくても、アメリカ海軍病院に行かなくても、野戦病院の研修医をやりながらも、大学で臨床と実験をやりながらも

ECFMG を取得できるのだということを証明したいという気持ちで一杯だった。2013年2月結果を知らせるメールが届いた。ICE; Pass CIS; Pass SEP; Pass, ついに Step2 CS に合格することができた (図6)。

		ICE (臨床能力)	CIS (マナー)	SEP (英語力)
1回目	2009年3月	Fail	Pass (boarder line)	Pass (boarder line)
2回目	2012年3月	Pass (boarder line)	Fail	Pass (boarder line)
3回目	2012年12月	Pass (high score)	Pass (high score)	Pass (boarder line)

- ①発音に気をつけてゆっくり話す→SEPはコンスタントにクリアできる!
- ②ICE/CISは頑張ればhigh scoreが取れる!

図6: USMLE step2 CS の成績と攻略のためのピットフォール。

もし1回目のstep2 CSで受かっていたら、その後アメリカで外科レジデントをしていたかもしれないため、中頭病院外科での経験をすることはできず、もし2回目のstep2 CSで受かっていたら、今頃アメリカでClinical Fellowshipをしていたかもしれないため、徳島大学小児外科との出会いがなかったのかもしれない。そう考えると、Step2 CSに2度落ちることではしか得られなかった素晴らしい経験や出会いに感謝したい。また、向こう1年以内にUSMLE step3に合格し、4年以内に小児外科専門医・医学博士号を取得した後にアメリカで小児外科分野でのclinical fellowshipを行うことが、現在の自分の目標である。

考 察

私の卒後教育課程を振り返り (図7), 大学時代・初期研修・外科後期研修・徳島大学小児外科入局後、と海外留学へのモチベーションには変化があったが、決して減ることがなかったもの、それは地元徳島を愛する気持ち・地元に貢献したいという熱い気持ちであった。この気持ちがあったからこそ留学へのモチベーションはゼ

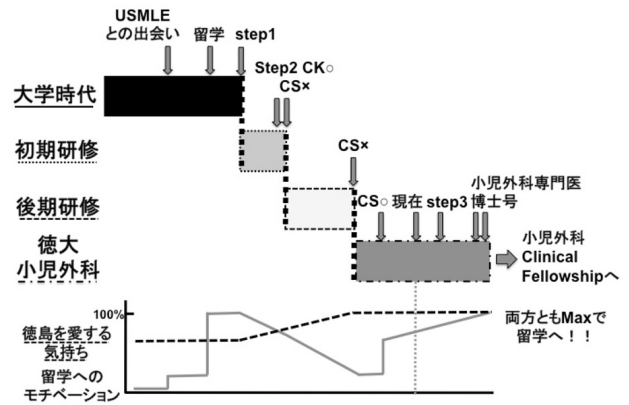


図7: 私の卒前・卒後教育課程のまとめ

ロになることはなく、3度にわたる渡米・step2 CS受験をも乗り越えることができたのだと確信している。Step1は基礎医学に焦点を当てたコンピュータ試験でありながらClinical basedでもあり、出題範囲が最も広く試験勉強に最も時間を要する。したがって、筆者の経験からは、ぜひとも学生時代に試験準備を始め、初期研修開始前後には受験しておくことをお勧めする。一方Step2 CKはほとんどが臨床関連問題であり、幅広くプライマリケアを学ぶであろう初期研修中であっても比較的楽しく、興味を持って試験勉強を行えることから、初期研修や後期研修中でも受験可能と考える。最後にstep2 CSに関して、受験者全体の合格率は75%である⁴⁾が、日本人にとっては難関であり、再受験を余儀なくされるケースも多い⁶⁾。しかし、筆者の経験から、①発音に気をつけてゆっくり話すことでSEPはboarder line performanceながらもコンスタントにクリアできること、②ICE, CISに関しては、努力することでhigh scoreでのpassが可能であることを銘記したい。医学部卒業後のキャリアデザインは人それぞれではあるが、優秀な後輩のみなさんには、是非とも世界にも目を向け、一度きりの人生を大いに楽しんで欲しいと願っている。

結 語

帰国子女でなくても、アメリカ海軍病院に行かなくても、野戦病院の研修医をやりながらも・大学で臨床と

実験をやりながらでも ECFMG を取得できる。医学部卒業後のキャリアデザインはひとそれぞれであるが、何をしたいのか・どうなりたいのかを大切に数年先・数十年先を見据えたライフプランニングが重要であると考えられた。

謝 辞

陰日向で私の卒後臨床研修と ECFMG 取得への挑戦を支えてくれた、最愛の妻真弓と二人の愛娘の陽南（はるな）・美南（みなみ）に感謝します。

文 献

- 1) 矢永勝彦：帰国した外科医から次世代へのメッセージ：米国における外科レジデントと移植外科の臨床経験. 日本外科学会雑誌, 114 : 98, 2013
 - 2) 橋元宏治：Being Committed to transplant : Try just one more time. 日本外科学会雑誌, 114 : 99, 2013
 - 3) 中好文：志を維持しましょう. 日本外科学会雑誌, 114 : 100, 2013
 - 4) Steven E. Minnick : 2011 ECFMG Annual Report : 8-55, 2011
 - 5) 宮城征四郎：研修教育のあるべき姿. 日本外科学会雑誌, 108 : 170, 2007
 - 6) 別城悠樹：米国での臨床研修を目指して：ECFMG certification 取得経験. 日本外科学会雑誌, 114 : 101, 2013
- 1) 矢永勝彦：帰国した外科医から次世代へのメッセー

A challenge to ECFMG certification : An experience and difficulties of Japanese examinee

Keigo Yada¹⁾, Hiroki Ishibashi¹⁾, Hiroki Mori¹⁾, Hirohiko Sato¹⁾, Tohru Utsunomiya²⁾, and Mitsuo Shimada²⁾

¹⁾*Department of Pediatric Surgery and Pediatric Endoscopic Surgery, the University of Tokushima, Tokushima, Japan*

²⁾*Department of Digestive and Transplant Surgery, the University of Tokushima, Tokushima, Japan*

Academic supervisor : Hiroki Ishibashi (Department of Pediatric Surgery and Pediatric Endoscopic Surgery, the University of Tokushima)

SUMMARY

Recently, many Japanese pediatric surgeons undertake clinical training abroad, especially in the United States of America (USA) which is one of the most attractive country for advanced clinical training. Since the Japanese government introduced a 2-year mandatory residency program in 2004, it has become more and more important for busy Japanese residents to spent time efficiently in order to achieve ECFMG (Educational Commission For Foreign Medical Graduates) certification.

ECFMG certification requires residents to pass both Step 1 and 2 of the United States Medical License Examination (USMLE). It is especially difficult to pass step2 CS (Clinical Skills) for many Japanese who are unfamiliar with the English language. For example, one of authors started to study for the USMLE in the 6th grade of the Japanese Medical School (MS4), passed step1 and step2 CK (Clinical Knowledge) during the 2-year mandatory intensive rotating residency program, and passed Step2 CS on the 3rd attempt during the general surgery residency program. This shows that a Japanese examinee can pass the ECFMG certificate even during a busy rotating residency program.

Key words : young pediatric surgeon, USMLE, career design, residency